千里国際学園　中等部・高等部

シリーズ
「世界は千里でひとつになる　The World Comes Together in Senri」
第６回　授業紹介：英語科選択科目「バイリンガリズム」

アドミッション／英語科　　井藤 眞由美

「前までは、二つの言葉を持つことは自分にとってあまりにも当たり前で自然なことであらためて考えたことがなかったけど、この授業でいろんな方面から『バイリンガルとは？』を考えて、何よりも自分のことをよりよく知ることができた。」

生徒たちがこんなコメントを最後に残してくれるのが何よりうれしい、Bilingualism という授業を担当しています。今回はこの授業の紹介をさせていただきます。

◆

これまでのこのシリーズで紹介しましたように、千里国際学園では、高校生になると学期ごとに生徒たち一人ひとりが授業を選択して自分の時間割を作ります。各教科で多様でユニークな授業が展開されていますが、英語科でもレベルごとに色々なジャンル・テーマの授業を合計約 50 種提供しています。Bilingualism という授業はこのたくさんある英語科の高校生向け選択授業の一つです。

◆

先日 INFOE 編集長の松本先生が学園を訪問された折、たまたまこの授業を見学に来てくださったのですが、ちょうどそのときに行っていたのは Show&Tell でした。アメリカに在住の方にとってはおなじみの、現地校の小学生のクラスでよく行われる、あの、Show&Tell。この課題を告げたとき多くの帰国生の生徒が「懐かしいー」と黄色い声を上げた、あの、Show&Tell です。

海外での生活でいろんな土地に行くたび集めた思い出のキーホルダーコレクション。ホームステイ先のおばあちゃんが編んでくれた手編みのマフラーと靴下。オーストラリア時間に設定したままの腕時計。アメリカの陸上大会で入賞したときのトロフィー。20 人以上の人のメッセージが書き込まれた大きな Wales の旗。ニュージーランドで友人にもらったマオリ族のネックレス。アメリカの小学校の校内大会決勝で辛くも負けた思い出の数学ゲーム『24』。などなど・・・自分の住んでいた土地や訪問した場所ですっかり自分の中に溶け込んだもう一つの文化。少し忘れかけていたかもしれないかけがえのない友情、思い出、家族愛などがよみがえり、みんなの感情が溶け合って、微笑ましい光景なのにどこかしんみりと胸に迫るものを感じる時間でした。

この Show&Tell は、第二チャプター『バイリンガリズムと社会』を扱う中での一つのアクティビティーです。日系アメリカ人 Allen Say の二冊の絵本を読み、『文化』『アイデンティティー』『時代に影響されるバイリンガリズム』などについて考えたあと、自分にとってのもう一つの文化を象徴するものを持ってきてそれについて語ろう、というものです。絵本の主人公 May にとって Tea with Milk が生まれ育った国、アメリカの象徴であるように。生徒たちの持ってきたもののほとんどは日ごろ自分の部屋の壁や天井に吊るしてあっていつも目にしているものとのこと。絵本の中の一節、The moment I am in one country, I am homesick for the other. ということばは生徒たちにも強く共感できるところです。

◆

二つの言葉を話せるってどういうことなんだろう。頭の中に心の中にそれらはどのように存在しているんだろう。自分にとって二つの言葉はどんな意味を持つのだろう。世界中にはどんなバイリンガルの環境があるんだろう。。。。。。そんなことを順序だって考察していく授業です。一学期を４つのチャプターで構成し、１の『バイリンガルの定義と測定』では、どういう人がバイリンガルと呼ばれるべきかを議論し、自分のバイリンガル度を測る実験などをし、バイリンガルとしての自分を語る小論文を書いて締めくくります。２は、先ほどお話した『バイリンガルと社会』で、仕上げには各自が世界のさまざまなバイリンガル事情から一つを選び、リサーチペーパーを書きます。３は『バイリンガリズムと言語学』４は『バイリンガリズムと教育心理学』。自分を知り、社会を考察したあとには、言語そのものに深く入っていき、人間の脳、心、というところにまで話を進めていきます。ちょうどこの原稿を書いている今、３の『言語学』にはいったところですので、まさに今していることを少し紹介させていただきます。